
名無しの手紙

山本良磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無しの手紙

【Nコード】

N1256BA

【作者名】

山本良磨

【あらすじ】

この世界には手紙屋という、手紙を人へ届ける職業があった。名前を名乗らない手紙屋の青年？名無し？ 有名な手紙屋を両親に持つ少女？メール？ 行方不明となっている親を探すため、メールは名無しと共に旅に出る。

第一話 リリアー又編 01

静かに打ち寄せる波の音をずっと聴いていた。

少女は堤防に座り込み、海上に突き出した足をぶらぶらさせていた。波音にリズムを合わせて小さく鼻歌を歌っている。

少女は白いワンピースを着て、さらにその上から黄土色のチョッキを羽織っていた。今の季節は冬なのだが、大陸の南に面し、海に面しているこの村では冬でも初夏のようにあたたかな気候だった。

彼女 メールという名の少女は、この堤防でぼうつとするのが日課となっていた。

周りにメール以外の人はいない。この村はもともと人が少ないのだが、朝、夜が明けた頃から村の男たちが漁へ出るので昼あたりでは人の数がめつきり減ってしまう。それでも女子どもはいるので、全くのひとりぼっちというわけではない。しかし、この時間帯ではわざと一通りの少ない場所へ行き、彼女が一人の時間を作っていた。メールは思いつきり息を吸い込んだ。潮の香りがする。背中あたりまで伸びている長髪が潮風に揺られた。彼女はこの場所と、ここから見える風景が好きだった。空は青く、海も青く、はるか遠くの水平線ではそれらの区別が曖昧なものとなってしまうている。眼下では波が堤防にあたって白いしぶきを立っている。

いつからか、こうやって海風を感じながら何もしないことを楽しむようになった。

朝や夕方は子どもたちと仲良く遊んでいる。村の子どもはみんな彼女よりも幼く、同い年以上の子どもはいなかった。彼女自身も十三才と幼い年齢ではあったが、幼くして一人で暮らしを始めていたこともあり、お姉ちゃんのような立場で子どもたちと接していくようになった。

しかし、メールも一人でゆっくりする時間が欲しかった。子どもたちと遊ぶ時間や、村のおばさんたちと話す時間、日々の家事に追

われる時間とは別に、年頃の女の子として無邪気でいられる時間が欲しいと感じた。そこで小さな友達と遊ぶ前に、一番お気に入りの中で場所を揺らしながら、たまに歌いながら過ごすようになっていた。

また、そうしていることで、日々の忙しさや楽しさのあまり、思わず忘れてしまいそうになってしまう大切なことを忘れずにもすんだ。

メールは小さく呟く。「お父さん、お母さん」

「おい」

誰もいないと思っていたのに声がしたので、メールは身をこわばらせた。ゆっくりと顔を右に向ける。左に向ける。しかし、声の主は見つからない。

「どこ見てんだ。下だよ、下」

言われたままに堤防の下 海と反対側にある道を見下ろした。

そこには、あきれたように少女を見上げる青年の姿があった。

誰だろう？ 少女は首をかしげた。この村は小さいため、村人全員顔はよく知っていた。雰囲気でも誰なのかがわかるくらいだ。しかし、全身を黒いコートで包んでいる青年はメールも見たことのない人だった。そもそも、ここからだと言った彼の顔が小さくてよくわからない。

もっとよく顔を見ようと少女は堤防から身を乗り出し、少しでも青年に顔を近づけた。目を凝らしてじっと見つめる。相手の方はいくと、そのあいだ一歩も動かなかつた。

メールは顔をしかめた。やはりここからではよくわからない。しかし、村の人ではなさそうだった。

「すみませーん、誰ですかー？」

青年はメールの方を見たまま、答えを返した。

「誰でもないし、誰でもいい。俺は手紙屋だ」

第一話 リリアー又編 02

手紙屋！ 青年の言葉を聞いたとき、メールは浮足立った。

「今そつちに行きますから、待つててくださいね！」

言いながら、堤防の階段を降りていった。メールの心は弾んでいた。

もしかしたら。もしかしたらこの人は。

メールが青年の目の前につくまで、彼は一步動かなかった。村を訪れたばかりの彼にとつても、メールは役に立つと思つたのだろう。

メールは訊ねた。「この村 リリアー又には来たばかりですか？」

「そつだ」

「じゃあ、まだポストはもう見てないんですね」

「その場所を訊きたくて俺は呼んだんだ」青年は淡々と答える。

「なら私について来てください。案内しますよ」

そう言つた後、メールは前へ走り出した。数メートル進んだとき、後ろを振り返つて青年を手招きした。

青年はゆつくりとメールの後をついてきた。

それからしばらくの間、二人は堤防に沿つて歩いた。ざわざわと風が木の葉を揺らす音が耳に流れ込んできた。

メールはしばらく青年の前を歩いてしたが、少しずつ足取りがゆつくりとなり、最終的には名無しと横に並んで歩く形になった。

メールはそつと青年の顔を覗き込んだ。会つた直後のやり取りで薄々感じてはいたが、やはり無愛想な人だった。今も顔を見られているのに気づいているはずなのに、嫌な顔どころかしわ一本すらも動かさない。ただ前を見ているだけだ。見た目も黒いコートに黒い肩掛けカバンと、どうも暗い雰囲気だ。両手には白い手袋をつけていた。

「ねえ、手紙屋さん」メールは青年と少し話してみることにした。

「なんだ」

「手紙屋って、楽しいですか？」

「……別に普通だ」

「でも村の外って魔物とかいて危険ですよ？ わざわざ危ないことをするってことは、楽しいこととかあるんじゃないですか？」

「他に仕事がなかったからな、仕方なくだ」

「ふーん……」

この世界には魔物という存在が大陸中に多く生息していた。人も食らうその危険性は、一般の人を村や町から外に出ることを不可能にした。かろうじて主要な町と町をつなぐ馬車が日に一回であるかどうか、その程度だ。次第に国中の町と村が分断されていき、いつしか人々が孤立してしまう状態となっていた。

その状況を見かねた首都の政府は？手紙屋？という特別な国家公務員を設けた。今にも消えてしまいたいそうだった町と町、人と人のつながりを手紙でつなぎ直そうという計画だった。

この手紙屋制度によって、一般の人は魔物と出会う危険を冒すことなく、違う町の人たちと交流することができるようになった。しかし一方で、手紙屋たちは彼らの代わりに魔物が闊歩する道中を通過しなければならぬ。それはこの国のどの職業よりも危険な仕事だった。

青年の面倒くさそうな返事から、これ以上この話題で話してもダメだ、と悟ったメルは別の話に切り替えることにした。

「実はですね、私の家族って、私以外全員手紙屋なんですよ」

青年の眉がピクリと動いた。よし、いけるかもしれない。

「お父さんもお母さんも、お姉ちゃんも手紙屋なんです。特にお父さんとお母さんはすごく有名な手紙屋なんですよ。あなたのひとつ前に来た手紙屋さんにもお父さんとお母さんのお話をしてみたいんですけど　そういえば、その手紙屋さん、私とほとんど年齢変わらないんですよ。なのに手紙屋なんてすごいですよね　すごく驚いてました。』あの二人の子どもなんだ、お前すごいな』って。私

の自慢のひとつなんですよ！」

あ、でももちろんお姉ちゃんも、と言ったところで、メールはようやく隣にいた青年がいなかったことに気づいた。

ふり返ると、メールの十数歩後ろで青年は立ち尽くしていた。じつとメールの顔を見続けている。見すぎて歩くことを忘れてしまっているみたいだった。

メールは来た道を戻り、青年に近寄る。そのあいだもじつと見つめられていた。ちよっぴり恥ずかしくなってくる。

「あの、どうかしたんですか？」

「……は……か？」

「え？」

「お前の親の名前はアランとシゼルなのか、と訊いたんだ」

「そう……そうです！ 知っていますか？」メールの声に元気が戻る。

「ああ、知っている。確かに二人は素晴らしい手紙屋だ」

メールは飛び跳ねたいくらい嬉しかった。青年が両親のを知っていたこと。親のことを褒めてもらえたこと。そして何より、ずっと無愛想だった青年の表情が明るくなったこと。

メールはほとんどスキップのような足取りで前を走る。

「ポストはもうすぐですよ！」

手紙屋が村についたとき、真つ先にすることは手紙の受け取りである。

ひとつの村や町に設置されているポストには、住人が思い思いの手紙を書き、投函している。それを全て引き取り、届け先ごとに仕分けして、別の町へと旅立ち、その町で再び手紙を回収する。もちろん村に滞在する間に、その村の住人宛ての手紙をしっかりと配達する。それが手紙屋の主な仕事である。メールは家族が手紙屋であるため、その仕事内容をほとんど把握していた。

リリアー又のポストは村の中心部分に会った。中心に井戸があり、昼間はもっぱら婦人たちの憩いの場となる広場の端っこにちょこんと立っていた。

メールに案内された青年は、ポストの背面にある、手紙屋にしか開けられない鍵を開け、中の手紙を取り出した。人口の少ないリリアー又らしく、手紙の数は数えるほどしかなかった。彼はそれを丁寧に肩から掛けているカバンへと入れていった。

「手紙、ちゃんと取れましたか」そばにいたメールは問いかけた。

「ああ、案内してくれてありがとな、メール」

へへへ、とメールは照れ笑いを浮かべる。

「今日はどこに泊まるんですか」

「来たばかりだから、まだ決めていない」

手紙屋は町から町へと留まることなく旅をすることが仕事のひとつとなつているため、宿泊や食事などの生活サポートは国がしっかりと行っている。宿泊する際には、村の宿屋を無料で使用することができるようになっていいる。おそらく青年も村唯一の宿屋に泊ることになるのだろう。

しかし、ここでメールは提案をした。「手紙屋さん、もしよかつたら私の家に泊まりませんか」

「別に気を使ってくれなくても、この村の宿屋に泊るから問題ない」
「えっと、まあ、そうなんですけど」

メールは悩んだ。この青年は両親のことを知っているようだ。どうにかして家に招き、親の話を訊いてみたい。どうにかして理由を作るできないだろうか。

「この宿の料理、あんまりおいしくないですよ」宿屋の人、嘘つ
いちゃってごめんなさい。

「……………」青年は何も言わない。

「あの、ダメ、ですか？」

「まあ、俺は泊れるならどこだっていい」

メールは嬉しさのあまり青年の右手をつかんだ。

「ホントですか！　じゃあ私の家に案内しますね。ついてきて」

「あらあら、メールちゃん、こんにちは」

名前を呼ばれて、メールは後ろを振り返った。そこには近所に住む壮年の婦人がいた。腕から綿で編んだバッグを提げている。

「あ、おばさん。こんにちは」

「メールちゃん、あんたは今日もかわいいね」

そんなことないです、と謙遜しようとしたメールを通り過ぎ、おばさんは青年の前に立っていた。

「見ない顔だねえ、誰だい？」

「手紙屋さんですよ」代わりにメールが答える。

おばさんは納得したようにうんうんうなずき、「いつもご苦労さん」とねぎらいの言葉を告げた。青年は黙ったまま小さく会釈を返した。

「そうそう、メールちゃん。これ見てよ」

言いながら、おばさんは持っていた手提げカバンの中をメールに見せてきた。そこには活きのいい魚介類がたくさん入っていた。

「うわあ、おいしそうですね」

「たくさん量買ったから、あとでメールちゃんの家にも持っていくねえ」

「ホントですか、ありがとうございます」メールは深々とお辞儀をした。

「まだ十三歳だっていうのに家事をしつかりとこなして、メールちゃん立派だねえ。あんた、いいお嫁さんになるよ」

再び謙遜しようとするメールから、もう一回青年へとおばさんは目を向けた。せわしない人だ。

「そういえば手紙屋さん。あんた、私宛の手紙はないかい？」

「失礼ですが、お名前は」

「私やマクブラインだよ」

青年はカバンからメモを取り出して確認した。おそらくそこに手紙を届ける宛先を書いているのだろう。

「残念ですが、私の手持ちにはあなた宛ての手紙はありません」

「そうかい」

「誰からの手紙を待っているんですか？」メールは訊ねた。

「息子からだよ。数年前に騎士団に入るために首都に行ったんだよ。あれからまったく音沙汰ないからさ。あたし、前に手紙を送ったんだよ。『元気であるなら返事よこしな』ってさ。そろそろ返事がないよ。きそつな頃だからさあ、ちよつと気になってね」

おばさんの息子さんのことはよく覚えていた。メールがまだ五歳くらいのころから、よく遊び相手になってくれていた。

あの頃はお父さんとお母さんもたまに家に帰ってきてくれてたなあ。

「手紙、早く来るといいですね」

「そうだねえ。手紙屋さん、ありがとね。それじゃあメールちゃん、またあとでね」

小さく手を振りながらおばさんは広場を去っていった。

「えっと、それじゃあ家に行きましょっか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1256ba/>

名無しの手紙

2012年1月15日01時48分発行